

# 完了報告書

市民公開講座

在宅医療について

～住み慣れた場所で最期まで暮らす方法～

申請者 八戸市立市民病院

緩和医療科 部長 佐藤 智

助成対象年度 2013年度前期

平成25年10月23日提出

1. 開催日時

平成25年9月29日（日） 14時～16時

2. 場所

八戸市公会堂（はちのへ健康まつりのステージイベントの一環として開催）

3. 開催目的

昨今の医療費の問題、疾病構造や人口構造の変化に伴い、国でも在宅医療の普及を推進し、住み慣れた自宅や介護施設等、患者が望む場所での看取りを行うことができる体制を確保することを目標としている。これに応じて、八戸地域でも在宅医療を推進するために、市民に在宅医療の具体的なイメージを持ってもらうため、在宅医療を行っている医療機関、医師会、訪問看護師、ケアマネジャー、実際に在宅での看取りを経験したご家族などと協同で開催する。

4. プログラム

第一部 講演

演題 在宅医療について ～新しい医療のかたち～

講師 はちのへファミリークリニック 院長 小倉 和也 氏

第二部 シンポジウム

シンポジスト

- ・はちのへファミリークリニック 院長 小倉 和也 氏
- ・居宅介護支援センター さざなみ 管理者 田中 富子 氏
- ・八戸市医師会訪問看護ステーション 副管理者 大浦 智香子 氏
- ・ご自宅でのお看取りを経験された方

5. 参加人数

約480名

6. 内容

(1) 第1部 講演

日頃より訪問診療を行っている先生に、昨今の医療をとりまく情勢から、なぜ今在宅医療なのか、在宅医療とは実際どのようなものか、在宅でできる医療についてお話ししていただいた。

## (2) 第2部 シンポジウム

ご自宅でお看取りをされた方の事例をもとに、医師、ケアマネジャー、訪問看護師、ご家族の方々に、退院前、退院してすぐのとき、安定期のとき、そしてお看取りのときの各場面において、どう対応してきたのかということをお話しいただいた。

### —シンポジウムの事例—

#### ○背景

- ・80代の男性
- ・脳挫傷からの認知症あり。大腸がんも患い手術。他県で療養中であったが、妻の生まれである八戸に転居。

#### ○在宅療養に至るまでの経緯

認知症による徘徊があり、転倒して入院。急性期病院入院中は、口から食事をとることができず点滴をしていた。ケアを嫌がり暴れるため、身体拘束もされており、医療スタッフからも「自宅で見るのは無理ではないか」と施設の入所を勧められていた。施設に入所したとしても、妻が通うことになり、妻も膝が悪く通うのが難しかった。

妻が「家で点滴ができれば連れて帰れるのに」とこぼしたところ、ケアマネジャーから「自宅でも点滴はできますよ」と言われたことがきっかけで、在宅での療養を決意する。

#### ○自宅での療養

ご自宅に戻ると、次第に口から食べられるようになり、点滴が不要になった。抑制も不要になり、車いすでの散歩や、訪問入浴によりお風呂にも入れるようになった。1年ほどの在宅療養を経て、ご自宅で亡くなる。

## 7. 感想

講師、シンポジストの方々には専門用語を避けてお話ししていただいたので、非常にわかりやすかった。介護用ベッドや車いす、訪問入浴のための浴槽なども、写真で提示あり、視覚でとらえることもできた。シンポジウムでは、ケアマネジャーや訪問看護師それぞれの立場からお話があったので、それぞれの役割も理解してもらえたのではないかと思う。

講師、シンポジストの方々には、事例の選定やシナリオの作成など、ご尽力いただき、そのおかげで今回の公開講座を成功させることができた。

公開講座終了後に、財団のものとは別にアンケートを実施したが、「在宅で過ごすイメージができた」「今後のことを考えるよいきっかけになった」といったご意見をいただき、開催目的は多少なりとも達成できたのではないかと思う（アンケート結果は別添1）。

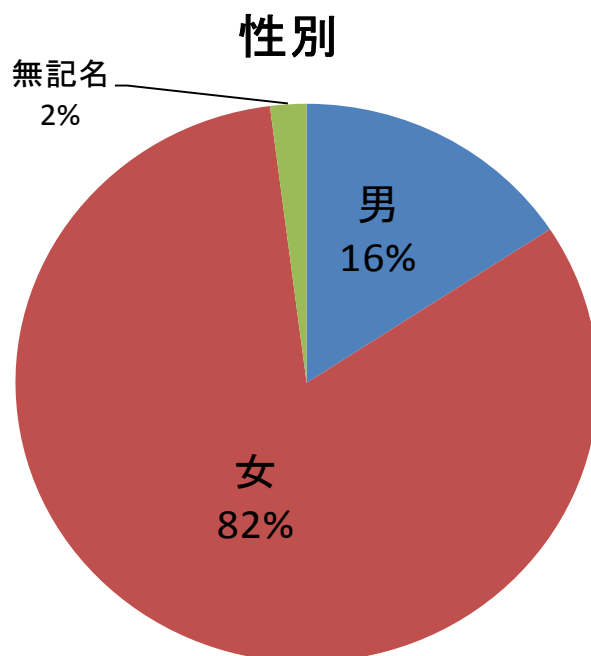
今回の市民公開講座は、八戸地域では初めての試みであったが、参加者も多く、市民の

関心の高さがうかがえた。在宅療養も選択肢の一つであることを市民に定着させていくためには、これからも何らかの形で市民への講座を継続していく必要がある。その際、今回は在宅サービスにかかる金銭的な面には触れなかったが、金銭的にいくらかかるか、ということも具体的にお知らせしていきたい。

「公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による」

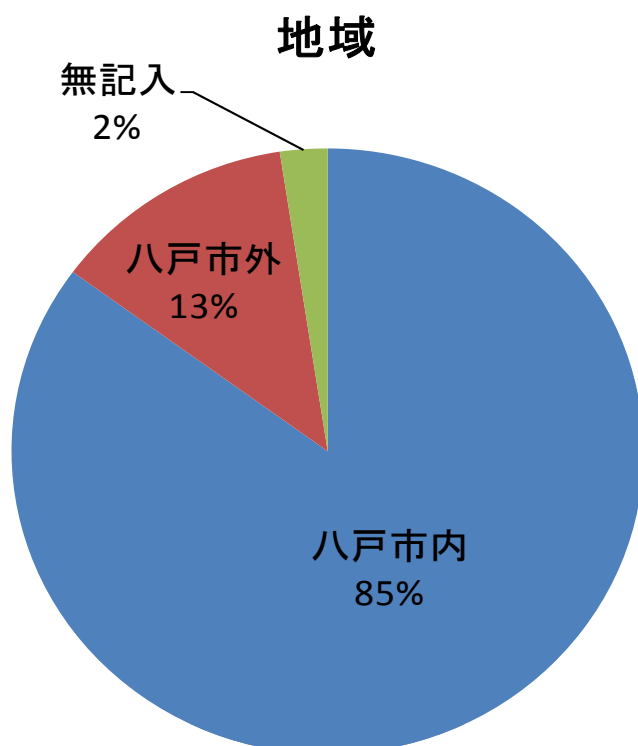
## 市民公開講座に関するアンケート(集計結果) N=248

1. 性別 【 男 (39名) ・ 女 (204名) ・ 無記入 (5名) 】



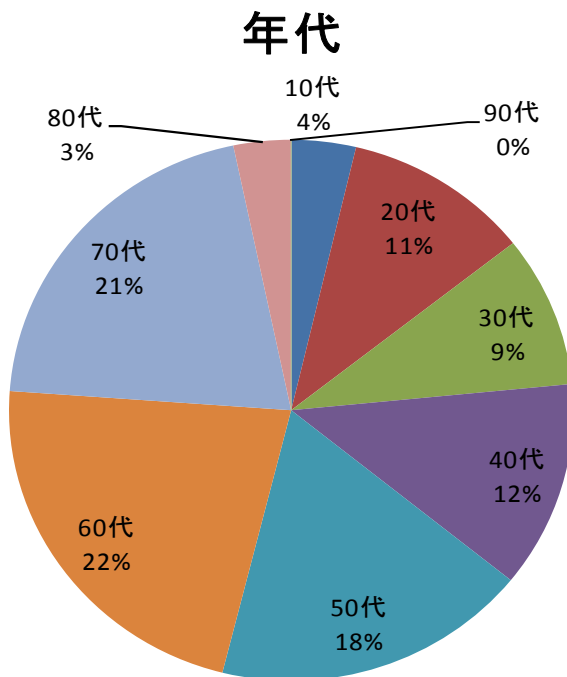
2. お住まいの地域

【 八戸市内 (211名) ・ 八戸市外 (31名) ・ 無記入 (6名) 】



### 3. 年代

10代 (9名) ・ 20代 (26名) ・ 30代 (22名) ・ 40代 (30名) ・ 50代 (44名)  
60代 (54名) ・ 70代 (50名) ・ 80代 (8名) ・ 90代 (0名) ・ 無記入 (7名)



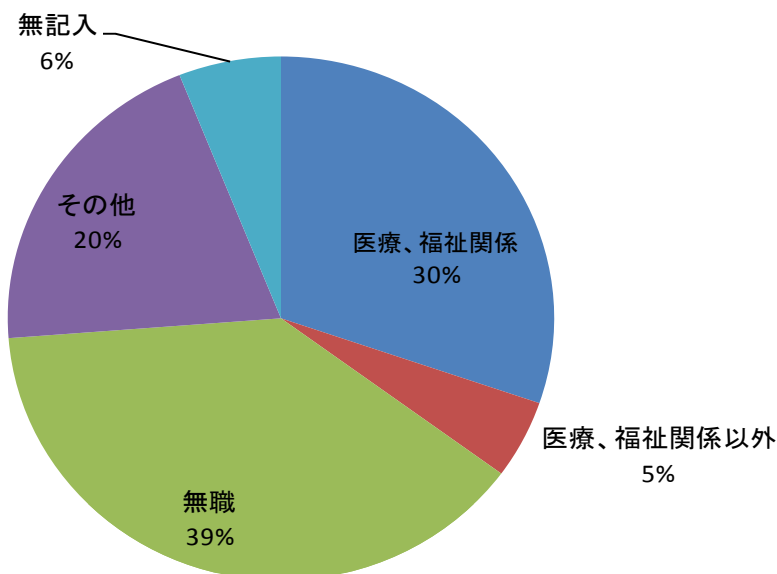
### 4. ご職業

①医療、福祉関係の仕事 (75名) ②医療、福祉関係以外の仕事 (12名)  
③無職 (96名) ④その他 (50名) 無記入 (15名)

※①、④の職名

ケアマネージャー (18名) ・ (準) 看護師 (16名) ・ 学生 (30名) ・ 介護職 (14名) ・ 訪問看護師 (4名) ・ 医師 (3名) ・ パート (2名) ・ 会社員 (2名) ・ 事務 (2名) ・ (以下1名) 歯科医・主婦・公務員・ボランティア体操指導員・在宅デイサービス・ケアアシスタント・看護教員・農業・保育士・医薬品営業・日本舞踊・MSW・福祉用具・老健事務・調剤薬局事務・自営業・在宅相談員

**職業**



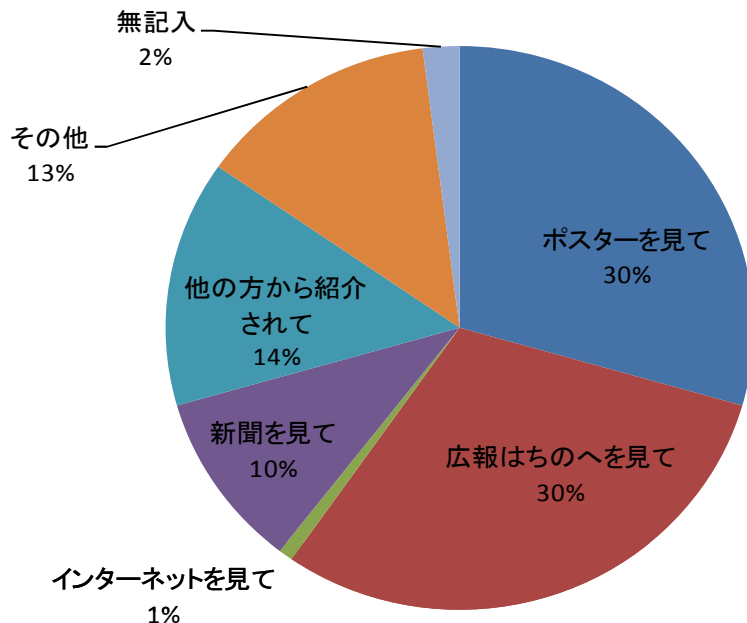
5. 本日の市民公開講座はどのようにしてお知りになりましたか？

- ①ポスターを見て (73名) ②広報はちのへを見て (75名) ③インターネットを見て (2名)  
 ④新聞を見て (25名) ⑤他の方から紹介されて (35名) ⑥その他 (33名) 無記入 (5名)

※その他 (内訳)

学校 (13名) ・研修会で (2名) ・町内会広報・チラシ・八戸認知症フォーラム・通院にて・ケアマネからの情報・娘の学校から・事務所で知った・広告・医師会より・親から・誘われて

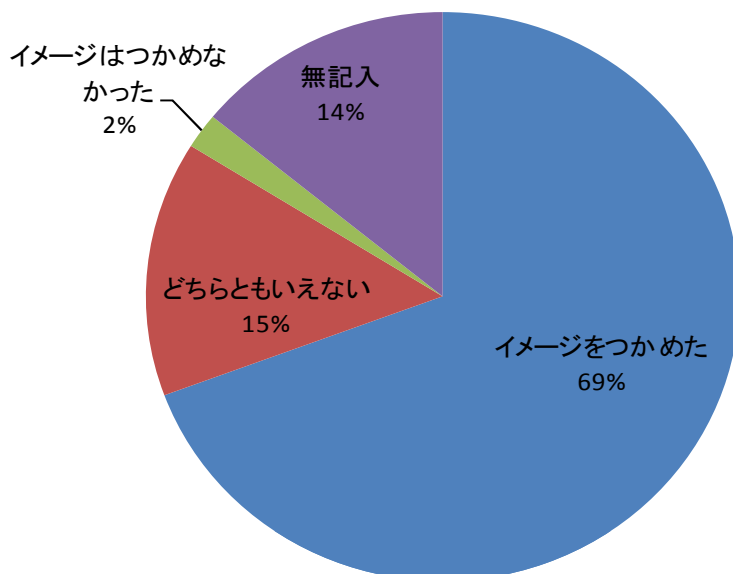
きっかけ



6. 市民公開講座を通じて、自宅で療養することのイメージはつかめましたか？

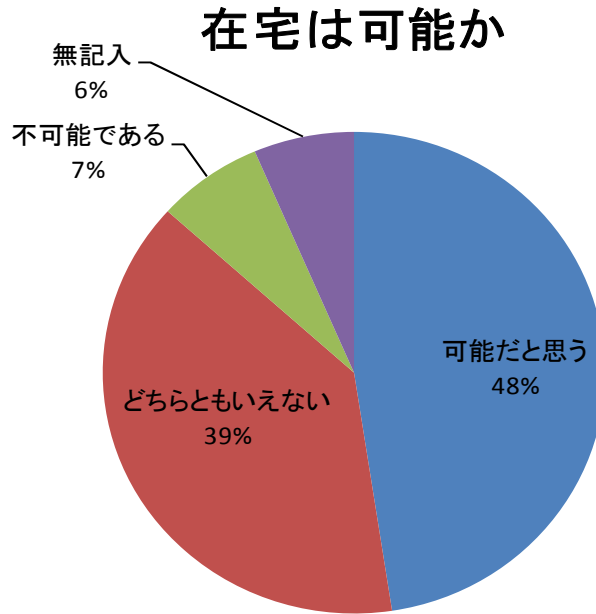
- ①イメージをつかめた (172名) ②どちらともいえない (36名)  
 ③イメージはつかめなかった (5名) 無記入 (35名)

イメージできたか



7. 自宅で最期まで療養すること（お看取りを含む）は可能だと思いますか？

①可能だと思う（118名） ②どちらともいえない（97名） ③不可能である（17名） 無記入（16名）



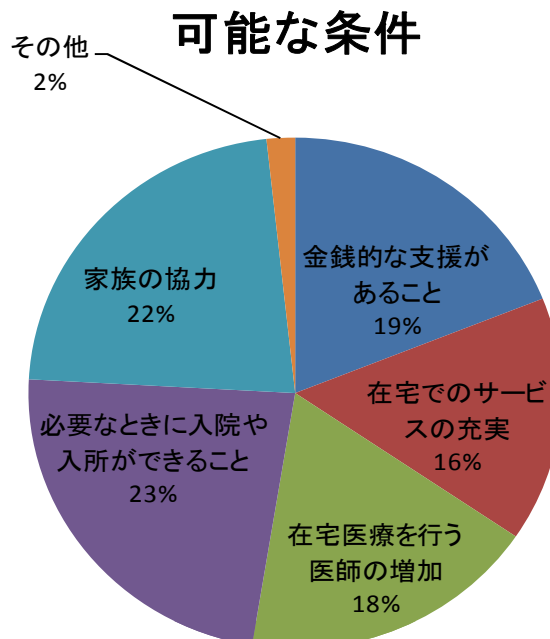
8. 7で「不可能である」と答えた方へ、どのような条件が整えば可能だと思いますか？

（あてはまるもの全てに○をつけてください）

①金銭的な支援があること（22名） ②在宅でのサービスの充実（18名）  
 ③在宅医療を行う医師の増加（21名） ④必要なときに入院や入所ができること（27名）  
 ⑤家族の協力（26名） ⑥その他（2名） 無記入（196名）

⑥その他（内訳）

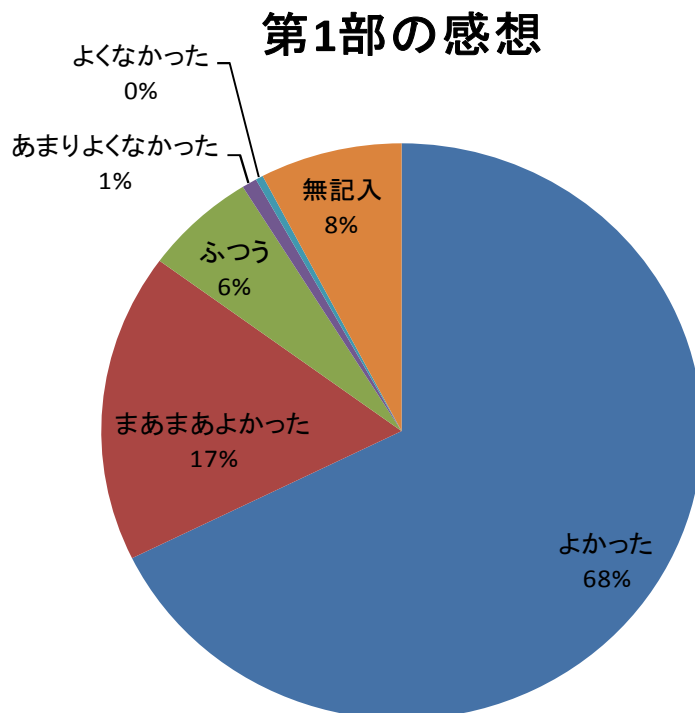
- ・借家で狭く介護用ベットを置くのが不可能
- ・延命を希望しないから
- ・個々の認識が在宅で最期を過ごせる、過ごしていいんだとならなければ無理。





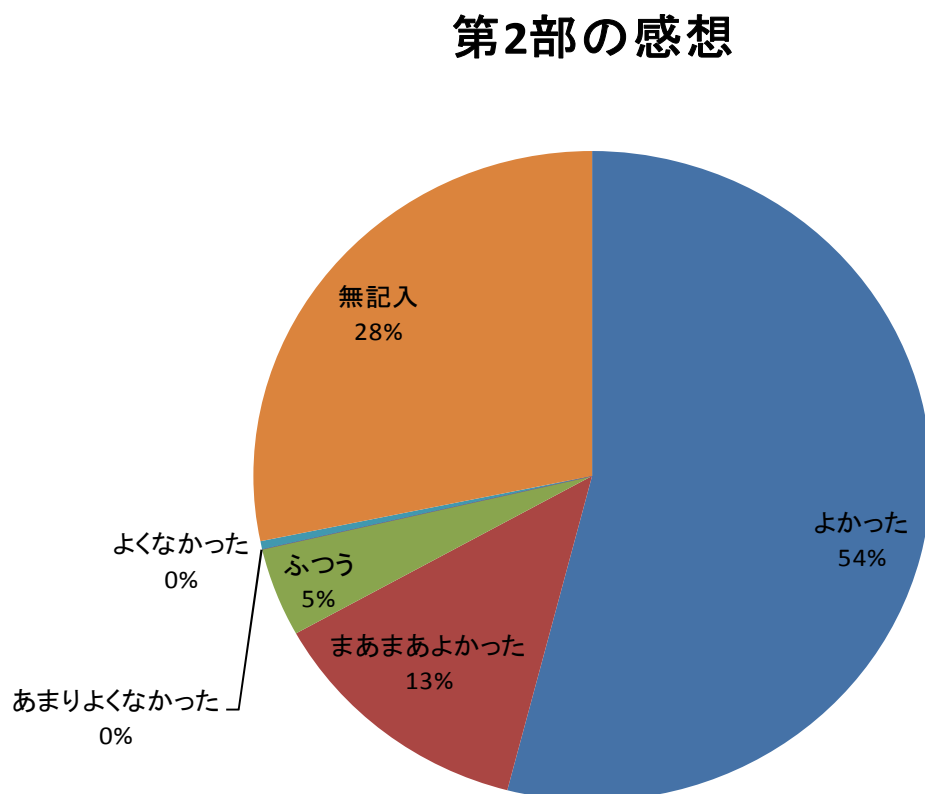
## 9. 第1部の講演について

- ①よかった (168名) ②まあまあよかった (43名) ③ふつう (15名) ④あまりよくなかった (2名)  
⑤よくなかった (1名) 無記入 (19名)



## 10. 第2部のシンポジウムについて

- ①よかった (134名) ②まあまあよかった (32名) ③ふつう (11名) ④あまりよくなかった (0名)  
⑤よくなかった (1名) 無記入 (70名)



11. 全体を通してのご感想や、在宅医療に関するご意見などございましたらご記入をお願いいたします

<p>・ 人間死ぬことは大ごとだと実感しました。（大ごととは前から覚悟はしてましたが）ポックリいきたいと本気で思いました。</p>
<p>・ イメージが少しちがった事に気付き、新しい型の医療の情報吸収に努め、1人暮らしの不安を解消されるよう、しっかり学んでいきたい。連携がしっかり行われていた。</p>
<p>・ 多くの市民が在宅で亡くなることを希望しているのが分かりました。小倉先生のお話が分かりやすくて良かったと思います。</p>
<p>・ 市役所又は医療機関との事前打合せが必要だと感じた。</p>
<p>・ 1部において本等を掲げていたが全く見えていない。スクリーンで見せてもらいたかった。資料も無く良かったとは言えない。介護は希望しないが介護保険支払うのはおかしいと思う。死は命あるものに平等に来るのに介護など醜い死は迎えたくない。</p>
<p>・ ありがとうございます。このような機会があれば、また参加したいと思います。</p>
<p>・ 認知症にならない自信あり、120%十分思いきり生きたのでボランティア活動できるまで回復できない時は、自分で昇天したい。延命治療不要。</p>
<p>・ 在宅で見てくれるドクターが多くなればと思います。在宅で患者に寄り添う医療が理想と思います。しかし外来がまだまだ先行している。</p>
<p>・ 在宅診療を行っている医師が圧倒的に少ないと思います。安心して老いるためには医療が欠かせません。医療機関同士の連携がスムーズではないような印象があります。</p>
<p>・ 子供たちも近くに居なくて、在宅医療を行うにしても先生方の増加も心配。年金生活にしてもだんだん少なくなっていくので金銭的なことも心配です。</p>
<p>・ 小倉先生のように在宅医師をたくさん増やしてほしい。医療システム（八戸）に不安を強く感じます。</p>
<p>・ 98歳の母も自宅療養で訪問看護の手厚い介護をいただき、又定期的にお医者様が訪問していただき、自宅で安らかに看取りました。</p>
<p>・ 主治医の先生の司会での進行が素晴らしい。ゆっくり進行する仕方は、まとめて一人で発表する体験談よりもわかりやすく、大変良かったです。（介護体験発表した私を思い出しました。）</p>
<p>・ 平成24年4月、父が在宅医療を受け、自宅で最期を迎えました。市民病院から小倉先生を紹介していただき、退院よりたった10日で亡くなりましたが父は本望だったと思うし、私どももゆっくりお別れできました。感謝しています。</p>
<p>・ 第1部は、全体的に分かりやすかった。第2部は、介護している実際の人、サポートした人達の実話の話が聞きやすかった。</p>
<p>・ 経費も参考に知りたかった。</p>
<p>・ 訪問診療がチームで行えているということが周知されてうれしかったです。小倉先生が制度を熟知されてサポートされていて本当に感動です。</p>
<p>・ とても参考になりました。私は今、後見人として面倒を見ていますが、先生のお話を聞いてとても勇気をもらえたような気がします。介護とは別に病気について相談に行きたいと思いました。</p>
<p>・ 出来る事なら自宅で最期をとしたいと思います。年金で可能な限り医療、他人様のお世話になり子供達に看取られたら幸せと思います。</p>

- 出来る事なら最期を自宅で迎えたいと思っている者ですが、自分の姉妹も無く子供たちも遠方に在住しており夫も高齢です。いずれにしろ独居生活になる訳ですが在宅医療を受けることが出来たとしても日常生活諸々が不安になります。
- 父を10年、母を5年在宅で看ましたが、父は8年前、母は去年他界し、今になって考えてみるとやはり、これで良かったのかと思うことがあります。本人達を含めて介護する方、されるかたの気持ち、複雑です。周りはみんな家で亡くなられて大往生だとは言いますが、今でもこれで良かったのかと。結果、私は職を失い、うつ病になりました。
- 在宅療養に移行する際、具体的にどのような準備が必要であり在宅での生活がどのようなものなのかイメージしない内容でした。また在宅療養の効果と大変さ等様々なメッセージが含まれていたため、今までにその立場になろうとしている人にとっても今後の選択肢の参考になったのではないかと思います。
- 在宅での看取りは、まだ相当にハードルが高いです。自分の家でよく話題に出すのですが、家族全員が「そんなの無理」と言うのが現状です。今までもよく話してきているのに、この反応なので本当にかっかりです。今日のような講演会がもっともっと必要なのかもしれない。
- どのような手続きが必要か知りたかった。
- 誰にでも訪れる最期、知識として自分なりに得ておく。それによって自分らしく看取られると思いました。
- 時間がなく、退席しました。
- 参考になった。
- 時間が無く、聞けなくて残念
- 金銭的なこと、介護者の疲労が並大抵ではなく大変。何かあった時のショートステイがある施設が少ない。
- 在宅医療の先生方は日々大変ご苦労されていると思います。訪問診療される先生方が増えることも必要だと思いますが、緩和ケア専門病棟をぜひ実現させて欲しいと思います。末期癌で自宅に帰るためにもいつでも専門的な病棟に入院できるという心の安心のための環境を整えて欲しいと思います。
- 看取りの様子をもう少し知りたかったです。
- 一番わかっていなかった部分が分かりました。自分が夫を看取る時のために、又私が自分で迎えると思う最期を自分も楽に看ってくれる人にもつらい思いをさせたくないと思っております。今日はありがとうございました。
- 2部のシンポジウムの体験談は良かったです。
- 八戸市の医師で訪問診療する先生は、将来八戸市の在宅の人をカバーできるものなのか。自分が年を取った時心配。
- 1部～一般向けの分かりやすい内容となっていた。きっかけとして良い機会となったと思います。2部～実際の家族の思い、希望を元にケアマネ、訪看、ドクターとの連携で在宅生活へ移って行った話を聞くことができ良い経験となりました。
- ケアマネ、訪看、医師、家族の経験談、体験談を実際に聞くことが出来、とても良かったです。在宅で看取るということは地域全体と連携し、ご本人、ご家族のサポートをみんなと連携することにより可能となっている。実際に聞くことでより現実的に考えることが出来、自分の事、家族のことを考えると、やはり在宅で看取りができるようにしたいと改めて思いました。

- ・ 介護力があれば、在宅で過ごすことが本人にとり、いいことだと思う。自分もそうしたい。訪問診療できるクリニックが少ないと思う。
- ・ 在宅の実習を終了して今回の講座で再確認することが出来た。
- ・ 1部では分かりやすく在宅への流れが理解することが出来た。2部では、在宅看護を通じて看護をする側として本当に患者に寄り添うことの大切さを学びました。ありがとうございました。
- ・ ちょうど在宅看護実習を終えたばかりで、講座を見ることにより良い復習になったと思う。
- ・ 在宅医療についての知識を深めることが出来ました。また実体験を踏まえての講義であったため、より興味深く聞くことが出来ました。
- ・ 内容が分かりやすくイメージを持つことが出来ました。第2部では事例に沿って、妻、ケアマネージャー、看護師の視点からどのような取り組みを行い、どのような変化があったのか具体的にイメージし、理解することが出来ました。
- ・ 抑制の話は、つなぎも抑制の1つになるのではないかと感じました。介護者側にとってはベルトも使わずにできるためいいが、介護を受ける側にとっては、つなぎもストレスの1つになると思った。脱ぎたいのに脱げないのは抑制ではないのですか。
- ・ 今はまだ仕事をしているので、体が弱くなったり病気になったことが無いので、先の事をだんだん考えていかなければ、と思います。ありがとうございました。
- ・ 在宅医療についてを身近に感じイメージを持つことが出来た。本人や家族の思い、希望が尊重され、最期を迎えることが出来るよう、更なる在宅医療サービスや制度の充実が図られるようになれば良いと考えます。
- ・ 在宅医療は大変だと思っていたが、様々なスタッフの手を借りることにより実現可能であることを知ることが出来た。
- ・ 在宅での介護をしていく上で1つの知識を得ることが出来て良かったです。施設でもターミナル経験があるため、この講座で得た情報等を心にとめて、仕事にも活用していきたいと思っています。
- ・ 在宅看取りをされた遺族を含め、関わったチームメンバーのシンポジウムは分かりやすく良かった。
- ・ 在宅医療を希望していても手段が分からず、1人で悩んでいる人もいます。市民に広報などを使って情報を提供するのが大切だと感じました。
- ・ パワーポイントの文字が小さかった。
- ・ 私も自宅介護で最期を迎えたいが老々介護になれば施設にお願いするしかないと思う。その際の費用の事が一番気になる。年金の範囲内だというのが希望であります。
- ・ 今後高齢化がどんどん進み、在宅医療を必要とする方々が増えてくるため、今まで以上にサービスを充実してだけでなく在宅医療を行うDrが増えていかないと、良質な在宅医療を行うことが出来ないと思うので、頑張っていて欲しいと感じた。
- ・ 仕事柄、最期を自宅で看取るケースを担当させていただくことがあります。身体的な変化と共に家族の心の変化も想像以上にあるものだなと深く考えさせられました。
- ・ 本人の意思がもっと確認できないだろうか。
- ・ 今年、小倉先生の在宅診療を受けていた夫を看取りました。1ヶ月弱の訪問診療でしたが、先生、そして訪問看護ステーションの方々、ケアマネさん、訪問入浴の方々、大変良くしていただきました。病院ではなく自宅で最期を迎えられることは本人も家族も幸せなことと思います。

- その人が自分らしく最期まで過ごすために、在宅医療が更に進んでいくことを望みます。安住さんご夫婦のあり方が素敵でした。
- 相談できるシステムが分かり、参考になりました。
- とても理解しやすい講座でした。心の準備のようなものをする事が出来ました。家族の事、自分の最期の事、イメージをつかんでおきたいと思いました。
- 大変勉強になりました。素晴らしいお方のお話を聞くことが出来た事、ありがとうございました。
- 緩和ケアについて、もっと具体的に聞きたかった。
- 実際に在宅で看取りをされたご家族のお話を聞いて良かったです。病院を退院する前に自宅での介護に向けて援助等あるといいなと思います。
- 在宅で最期を迎えるというのは、いかに多くの人のサポートが必要かと思えば複雑な気持ちです。金銭的なことも大きいと思います。
- ごく基本的なことの話が多く、八戸の現状などをもっと知りたかった。
- 東京で在宅医療に携わっている八戸出身の者です。八戸に残している両親の心配をしていたのですが、八戸の地区も在宅医療があることが分かって少し安心しました。又次回このような機会があったら是非参加させていただきたいと思います。
- 有難うございました。

## 本日の市民公開講座に関するアンケートのお願い

本日はご来場いただき、誠にありがとうございました。よろしければ皆様のご意見等をお聞かせください。  
(あてはまるものに○をつけてください)

1. 性別 【 男 ・ 女 】
2. お住まいの地域 【 八戸市内 ・ 八戸市外 】
3. 年代  
【 10代 ・ 20代 ・ 30代 ・ 40代 ・ 50代 ・ 60代 ・ 70代 ・ 80代 ・ 90代 】
4. ご職業  
① 医療、福祉関係(職種： )  
② 医療、福祉関係以外の仕事 ③ 仕事はしていない ④ その他( )
5. 本日の市民公開講座はどのようにしてお知りになりましたか？  
① ポスターを見て ② 広報はちのへを見て ③ インターネットを見て ④ 新聞を見て  
⑤ 他の方から紹介されて ⑥ その他( )
6. 市民公開講座を通じて、自宅で療養することのイメージはつかめましたか？  
① イメージをつかめた ② どちらともいえない ③ イメージはつかめなかった
7. 自宅で最期まで療養すること(お看取りを含む)は可能だと思いますか？  
① 可能だと思う ② どちらともいえない ③ 不可能である⇒8へお進みください
8. 7で「不可能である」と答えた方へ、どのような条件が整えば可能だと思いますか？  
(あてはまるもの全てに○をつけてください)  
① 金銭的な支援があること ② 在宅でのサービスの充実 ③ 在宅医療を行う医師の増加  
④ 必要なときに入院や入所ができること ⑤ 家族の協力 ⑥ その他( )
9. 第1部の講演について  
① よかった ② まあまあよかった ③ ふつう ④ あまりよくなかった ⑤ よくなかった
10. 第2部のシンポジウムについて  
① よかった ② まあまあよかった ③ ふつう ④ あまりよくなかった ⑤ よくなかった
11. 全体を通してのご感想や、在宅医療に関するご意見などございましたらご記入をお願いいたします

ご協力ありがとうございます。2枚目にもご記入をお願いいたします。

# 在宅医療の実際

～新しい医療のかたち～

はちのへファミリークリニック  
小倉和也

## 本日の目標

- 訪問診療とはどんなものか、具体的にイメージできる
- 様々な病気を抱えながらも自宅で過ごすという選択肢があることを理解する



## 再び病院から在宅へ

- 近年の介護保険制度などの充実で、病気・老衰などで医療が必要となった場合でも、家で過ごすことができるようになった



## 診療の流れ

- まず訪問前に自宅・施設に電話し状況を確認
- 訪問し経過・訪問看護・デリの記録など確認
- 診察・検査
- その場で電子カルテを記載し報告書として訪問看護・ご家族用として印刷
- 場合によっては処方箋も発行
- 帰院後すぐに訪看・ケアマネにTEL/FAX



## 訪問診療でできること

- 内科・皮膚科・整形外科・小児科・心療内科のコモンディズィーズの一般診療
- 検査: 血液検査・尿検査・CXP・エコー(心・腹部・消化管・頸部・乳房・下肢静脈・骨密度)・心電図・呼吸機能検査など
- 処置: 褥瘡・熱傷処置、縫合、胸水・腹水穿刺など
- 在宅酸素、人工呼吸器、経管栄養、持続ドレーン吸引、麻薬持続注入など

## 看取り

- 高齢者の自然な看取り・癌末期の緩和医療も可能
- 施設での看取りも徐々に浸透
- 救急搬送・蘇生・点滴は極力しないのがポイント
  - なるべく自然に、苦痛を与えない
- 最期の時間をご家族と穏やかに
- それぞれのご家族にあった形で



## 訪問看護とは？

- 訪問看護とは訪問看護ステーションから、病気や障害を持った人が住み慣れた地域やご家庭で、その人らしく療養生活を送れるように、看護師等が生活の場へ訪問し、看護ケアを提供し、自立への援助を促し、療養生活を支援するサービス

(全国訪問看護事業協会HPより)



## 訪問介護とは？

- 入浴、排せつ、食事等の介護、調理、洗濯、掃除等の家事、生活等に関する相談及び助言その他の居宅要介護者等に必要な日常生活上の世話
- ヘルパーさんが訪問して“身体介護”や“家事援助”を行う

(介護保険法施行規則第5条)



## ケアマネージャーとは？

- 介護支援専門員(ケアマネージャー)は、

在宅や施設で生活している方がたの相談に応じ、介護サービスの利用調整や関係者間の連絡などを行うことで、利用者の心身の状況にあわせて自立した日常生活を営むことができるよう支援をしている。

(全国社会福祉協議会HPより)



## 施設との連携

- 有料老人ホーム・グループホームなどでも場合によっては最期まで過ごすことが可能
- 事前に施設の方針・体制と本人・家族の意向を調整し、主治医と確認しておくことが必要



## 病院との連携

- 救急との連携
  - 訪問⇒救急搬送は紹介状を持参し同乗
  - 緊急時の搬送⇒電話連絡+情報提供書FAX
  - 不在時の搬送⇒出張先からでも情報提供可能
- 緩和ケア科との連携
- 各科との連携



## 自宅で迎える最期

- 病状や環境により選択可能な場合とそうでない場合がある
- 選択できた場合には、ご家族のもと、住み慣れた場所で最も自分らしい最期を迎えられる

